

覚え書き、危機における人間像

—— Xenophontis, *Historia Graeca*, II, ii, iii, iv ——

藤 澤 郁 夫*

(平成5年10月18日受理)

要 旨

ペロポネソス戦争の敗戦処理という危機の時代に幾人かの政治指導者が現われた。本論はそうした幾人かの指導者のうちで、寡頭政権の首魁として牛耳を執ったクリティアスと、混乱のなかで寡頭政権に参画しながら結局はクリティアスとの意見の食違いから処刑されたテラメネスの事績をまず振り返る。しかし、我々の主眼は両者の攻防のなかで交わされた議論にある。一方に権力の獲得 (pleonektein) という闘争過程の現実があり、こうした事実を史実として検証することは歴史家の領分だとすれば、本論の意図はむしろ混乱のさなかで交わされた言論の攻防から両者の人間像に光を当て、両者の基本的な論点を取り出すことにある。その結果、本論が到達している暫定的な見通しでは、国制選択が権力の獲得という現実の闘争過程で機能している場合には、それ自体を道徳的善悪として論じる視点は両者には希薄なようだ。むしろ、いかなる国制選択にコミットしようと、人間として充たすべき要件を指摘する点で両者の主張はほぼ足並みを揃えている。ここには、最善の国制から人間の活動の諸事万般を演繹するような思考様式は見当たらない。

KEY WORDS

pleonektein 権力の獲得

metabolai 変節

prodosia 裏切り行為

kothornos 日和見主義者

1 三十人寡頭政成立前後

複雑な外交関係と度重なる戦争のなかでポリスが一つの自立的な存在として、ポリスの相対的に自立した機能が人々の意識に上りだすと、「国制 (politeia)」選択が権力の獲得の問題と並行するかたちで登場してくる。人間の幸不幸と国制選択の善悪の問題はただちに同じレベルにあるとは言えないが、相互に連続的な同質の問題群に落ちるという自覚が人々の意識に芽生えだす。こうして国制選択への人間の関与は、畢竟、当該の人間の生活心情や価値意識を表明することである。国制選択はいわばその人間の生活心情や価値意識の妥当性を闘争という政治の舞台に委ねることを意味する。三十人寡頭政の出現は空前の緊張関係においてそうした闘争を演出させた歴史的事件であった。

前405年、ペロポネソス戦争も終決に近づき、パウサニ阿斯王はアテナイに進軍、アカデメイ

* 社会系教育講座

アに野営する一方、将軍リュサンドロスはペイライエウスの海上封鎖に乗り出す。かくしてアテナイは陸海の包囲網に落ちた。食料事情は悪化の一途をたどり市域（アスチュ）には餓死者が累々として山をなす惨状。市民権回復による市民数の確保で応戦してはみたものの、もはやなす術もなかった。アテナイの矜持は長城破壊を条件に「和平締結 (eirenen poieisthai) ⁽¹⁾」の提案をしたアルケストラトスを投獄した心意気にかすかに残照していた。追い詰められたこうした窮状下で、テラメネスを全権大使とする十人の使節 (presbeis) がスパルタに派遣され、和平の条件が探られた。「アテナイの長城とペイライエウスの城壁の破壊。12艘を除きすべての三段櫓船の引き渡し。亡命アテナイ人の受け入れ。スパルタと同一の敵味方をもつこと（これは事実上のシュンマキア）。必要の場合にはラケダイモン人たちのいかなる指揮にも従うこと ⁽²⁾」。以上が講和条件であった。

使節団帰国の翌日民会開催「若干の異論はあったものの (anteiponton de tinon) ⁽³⁾」アテナイ側はこの条件を受諾した。今日風に言えば条約の批准にこぎつけたことを意味する。ペロポネソス側は嬉々として長城破壊を開始。長城破壊は破壊者たちの心情において「ヘラス（ギリシア世界）における自由の始まり (archein tes eleutherias) ⁽⁴⁾」であったとクセノフォンが伝えていることから、アテナイの覇権は他ポリスにとって抑圧であった事実が推定される。さて、亡命アテナイ人が帰還するなか——このなかにはクリティアスもいた——「アルコンなき年 (anarchian ton eniauton) ⁽⁵⁾」にかの寡頭政が樹立される。敗戦処理の一環としてまず民衆 (demos) によって三十人が選出される。選ばれたのは次の人たちである。ポリュカレス、クリティアス、メーロビオス、ヒッポロコス、エウクレイデース、ヒエローン、ムネーシロコス、クレモン、テラメネス、アレシアス、ディオクレース、ファイドリアス、カイレレオース、アナイティオス、ペイソーン、ソフォクレース、エラトステネース、カリクレース、オノマクレース、テオグニス、アイスキネース、テオゲネース、クレオメーデース、エラシストラトス、フェイドーン、ドラコンティデース、エウマテース、アリストテレース、ヒッポマコス、ムネーシテイデース⁽⁶⁾。彼らの任務は「父祖の法律 (patrious nomous) ⁽⁷⁾」を起草して国制を執り行うことであった。しかし、法律の起草・公布 (syggraphein, apodeiknynai) は遅延を重ねた挙げ句、彼ら三十人に好都合な評議会 (boule) と役人が任命される⁽⁸⁾。この段階で三十人 (hoi triakonta) は実質的に国政の牛耳を執ったものと解される。この背景にはスパルタがこの寡頭政権を背後で支えたことがあった。

まずこの寡頭政権は、民主政権下で (en tei demokratiai) 貴族層 (kalois k'gathois) に重圧となっていたことが知られた職業的告訴を生業とする人 (apo sykophantias zontas) を逮捕のうえ処刑する⁽⁹⁾。この事実から、寡頭政権内部には微妙な意見の食違いはあったろうが、少なくとも政権成立当初においては、貴族層 (kaloi k'agathoi) に有利な政策決定が行なわれたものと解される⁽¹⁰⁾。さらに政権の後盾を得るために、部隊の維持費をもつことを条件にスパルタの守備隊 (phrouroi) 派遣の依頼の命を受けてアイスキネスとアリストテレスがリュサンドロスの許に派遣される。この事実のうちにこの寡頭政権が権力維持のために軍事力を行使することも辞さない明確な意志が表現されている。クセノフォンはこの決定の理由を「彼ら（三十人）が思いのままに (hopos boulointo) ポリスを操作しうるため⁽¹¹⁾」と説明している。従って、この段階でそれは政権の明確な意志であったはずである。

リュサンドロスは守備隊 (phrouroi) と監督官 (harmostes) カリビオスを送って三十人に協力することに同意する。カリビオスはすぐに「ありとあらゆる世話をうけて (pasei

therapeiai)⁽¹²⁾」寡頭政権の傀儡と化してしまう。今も昔も賄賂が権力維持の手強い手段であることを裏付ける。次の段階で「矮小で取るに足りない連中 (ponerous te kai oligou axious)」ではもはやなくて、無視する訳にはゆかず、ひとたび反攻に出ると多数の (pleistous) の支持を集めそうだと判断された連中⁽¹³⁾」が検挙された。三十人寡頭政権のこの挙動にも大衆ないし民衆 (pleistoi, or demos) を仮想敵対集団と描く思考の枠組みが投影されていよう。かくして、国制案の起草委員会——しかも、期待された国制はクレイステネス型の穏健民主政であった——にすぎなかった三十人は、民主政下での亡命生活からアテナイの政治舞台に復帰したクリティアスを首魁にして、スパルタの軍事力を背景にアテナイを恐怖に陥れた。

2 クリティアスとテラメネスの攻防

政権の出発当初、クリティアスとテラメネスは志を同じく (homognomon) していたし、関係も良好 (philos) であった⁽¹⁴⁾。しかし、「大衆殺害 (to pollous apokteinein)⁽¹⁵⁾」にクリティアスが手を染めだすと、両者の足並みは乱れはじめる。大衆 (demos, polloi, pleistoi) が紛れもない強力な政治勢力であることを認識している点で両者は甲乙つけがたいが、政策実行のレベルは微妙な食違いを見せている。テラメネスの主張はこうである。「いやしくも民衆 (demos) に尊敬されている人間であって、かつまた、貴族層 (tous de kalous k'agathous) に対してなんらの危害も加えていない人間が殺されるのはよろしくない。私だってあなただってポリスの機嫌をとるために (tou areскеin heneka tei polei) 多くのことを語り実行もしたではないか⁽¹⁶⁾。」このテラメネスの台詞には、(demos) と貴族層 (kaloi k'agathoi) の二分法が既成事実として潜んでおり、民衆の敬意 (etimato hypo tou demou) に一定の積極的な価値を認める姿勢が窺える。むしろ貴族層に危害を加えないことは消極的な価値でしかないかのような言い方である。この台詞の今一つの重大性には後で触れるが、しかし、それは両陣営への迎合と受け取られかねない危険を内蔵していた。ただ単に政敵を失脚させるレトリックとしてクリティアスが彼を「日和見主義者 (ho kothornos)⁽¹⁷⁾」と呼んだのではないものと推察されるのである。

とはいえ、クセノフォンの論定によれば、まだこの段階ではクリティアスはテラメネスを仲間 (政治的同志) として遇していた (oikeios echreto)⁽¹⁸⁾。従って、以下はクリティアスによる穏やかなテラメネスへの懸念の表明と解される。「権力を獲得しようとする者にとって、それを妨げる十分な力を有する者たちを排除せずにおくことは許されない。もしあなたが、我々が三十人であって一人ではないことを理由に、この政権 (tautes tes arches) を注意深く見守る (epimeleisthai) 必要がない——僭主政 (tyrannis) ならいざしらず——と判断しているのだとしたら、あなたはお人好しだ (euethes ei)⁽¹⁹⁾。」しかし、完全にはテラメネスの意見を無視しえず妥協策が講じられる。即ち、「事態に対処しうる有能な協力者 (koinonous hikanous) を迎え入れなければ、寡頭政の維持 (ten oligarchian diamenein) は不可能だ⁽²⁰⁾」とするテラメネスの献策が——全面拒否の場合には「市民たちが (hoi politai) がテラメネスの許に結集する (syrrueiesan) のではないか⁽²¹⁾」というクリティアスの疑心も手伝って——「政権に関与する三千人 (trischilious tous methexontas de ton pragmaton) を登録する⁽²²⁾」という政策に結実したからである。

しかし、それも束の間、やがて寡頭政権はテラメネスを「足枷 (empodon) ⁽²³⁾」と考えはじめる。三十人は「テラメネスが国制の破壊者だといってつぎつぎと評議員に中傷してまわり、血気にはやる (thrasytatoi) 若者とおぼしき連中に、脇下に短剣をしのばせて加勢するよう命じたうえで、評議會を招集した⁽²⁴⁾」のである。以下、評議會での両者の論戦に焦点を合わせて伏在する問題を考えてみたい。

3 クリティアスによるテラメネス弾劾

三十人の挙動が陰謀 (epibouleuousin) だとはクセノフォンの言い方だ。短剣をしのばせた若者に囲まれてのクリティアスの評議會弾劾演説、それを承けてのテラメネスの逮捕・処刑となると、それは陰謀以外の何物でもなかったであろう。以下、クリティアスの主張の大筋をたどり、彼の論点を整理しておこう。「評議員の諸君、諸君のうちでだれかが、処刑される者の数が多すぎると思うとすれば、国制変革 (politeiai methistantai) の際には、いつでもこうしたことが起こるのだということを理解してもらいたい⁽²⁵⁾」とまず現状が国制変革という例外状況にあることを訴える。「ここ (アテナイ) では、国制を寡頭政に変革しようとしているのだから、敵対するものが多数 (pleistous) となるのは止むをえない⁽²⁶⁾」とする。この現状認識は、寡頭政が貴族層 (kaloi k'agathoi) を支持基盤とする国制である一方、民主政が大衆ないし多数 (demos, polloi, pleistoi) を支持基盤にする国制だという前提から帰結するものである。クリティアスの体験から「我々と諸君のような (貴族層の) 人間には、民主政というものは苛酷な国制だ (chalepen politeian einai demokratian) ⁽²⁷⁾」という実感が語られる。この悲痛な告白は、彼が民主政治下で経験した亡命生活を想えば、けだし正直な感慨であったろうし、また民主政が貴族層に及ぼした生活実感の一端として注目される。

加えて、スパルタ側の意向に合致すること (syn tei Lakedaimonion gnomei) が、今次の国制変革の正当性を証すものとされる⁽²⁸⁾。こうしたことが論拠として採用される背景には、常に貴族層 (beltistoi) がスパルタ側の信頼を得ている (pistoι) のだという認識があったはずである⁽²⁹⁾。「さて、ここにいるこのテラメネスは、彼に可能な手段を尽くして、我々および諸君たちを滅ぼそうとしていることに我々は気づいている。このことが本当なのは、次のことを考えてみればよい。我々が民衆指導者の誰かを (tina demagogon) 排除しようとする、このテラメネスほどたてをつき (psegonta) 反対をする (enantioumenon) 者はいないのだ。もし初めから彼がそういう意向だったのなら、彼は敵対者 (polemios) だったことになる⁽³⁰⁾。」しかるにそうであったのではない。なぜなら、「彼こそが対ラケダイモン人に対する信頼 (pistis) と友好 (philia) の政策を、彼こそが民主政の転覆 (he tou demou katalysis) のイニシアティブをとったのだ⁽³¹⁾」からである。民主政の転覆というこの罪状は、民主政がありうべき当然の国制だという思潮のイデオロギー化とともに、国家転覆罪としてその量刑は死刑に定着する。そうした動向と現状を睨んでのクリティアスの計算され尽くした罪状告発であった。

クリティアスの主張はこうだ。そもそも民主政転覆のイニシアティブをとった男が、民衆指導者 (demagogos) の掃討に対して悉くたてをつくというのは「裏切り行為 (prodosia)」以外の何物でもない。「従って、彼は敵対者であるばかりか裏切り者 (prodotes) としても罰せられて当然なのである。また、裏切り行為 (prodosia) は戦争以上に恐ろしい。なぜなら、顕な危険

よりも目に見えない危険の方が一段と監視しにくいからである。即ち、ひとたび和平を結べば、敵とは再び信頼できる友好関係に快復しうけれども、たとえ裏切り者を捕えたところで、この男と和解することはできないし、もはや誰もこの男を信じる者はいないからである⁽³²⁾。】嵩に掛かってクリティアスの追及の手は弛まない。「この男のやっていることが目新しいことではなくて、生来の裏切り者 (physei prodotes) であることを諸君に納得してもらうために、この男のしてきたこと (pepragmena) を想起してもらいたいものだ。最初この男は民衆に慕われた (timomenos hypo tou demou) のに、父のハグノーンに従って民主政を (ten demokratian) 四百人寡頭政に (eis tous tetrakosious) に変えようと躍起になり牛耳を執った (eproteuon)。ところが、この寡頭政に対する対抗勢力が結集するのを感じ取るや寡頭政に反旗を翻し、またもや民主政の牛耳を執った (protos au hegemon) のだ。彼が『日和見主義者 (ho kothornos)』と異名を取ったのはこういう事情からなのである⁽³³⁾。】

「ちょうど(悲劇役者の履く)長靴が左右両方の足に合いそうに見えるように、この男は両方に顔を向けている。しかし、テラメネス、生きていけると言える男は、何か困難があるや即座に向きを変え、仲間に面倒を招来させることに長けているのではなくて、船上にあるごとく (hosper en nei), 順風に落ち着くまで (an eis ouron katastosin) 耐えぬく (diaponeisthai) べきなのである⁽³⁴⁾。」こうして、両方に合わせる (harmottein) 人は、責任をまた合わせてとる人 (metaitios) ではなかろうか。両方で儲ける人は損の危険も倍加する。「むろんいかなる国制変革にせよ死者はつきものだ (thanatephoroi)。しかし、あなたはその変節しやすい性格の故に (dia to eumetabolos einai), 民衆による (hypo tou demou) 寡頭派に属する人間たちの殺害にも、同時にまた、貴族派による (hypo ton beltionon) 民主派に属する人間たちの殺害にも共に責任があるのである (metaitios)⁽³⁵⁾。」むろん、これは厳密な論理などと言える代物でなくレトリックにすぎない。むしろクリティアスのこのレトリックのうちに、民衆 (demos) = 大衆 (pleistoi), および、貴族層 (beltiones) = 寡頭派 (ex orgarchias) という二分法が鮮明に表現されている。国制変革という彼の認識はこの二分法の枠内で動いている。

クリティアスはさらに続ける。「誰であれ権力の獲得 (pleonektein) だけに心を配り、なんら名誉 (tou kalou) や友 (ton philon) のことを顧みない人間であると判明すれば、こういう男を見逃さねばならない理由があろうか。この男の変節 (autou tas metabolas) を承知しているから、同じことを我々にしないか我々は注意する必要がある。よって我々はこの男を我々と諸君に陰謀を企てる者として (hos epibouleuonta) および裏切る者として (hos prodidonta) 告発するものである (hypagomen)⁽³⁶⁾。」この主張は、権力の獲得 (pleonektein) とは次元を異にする、いわば人間としての資格において要求される名誉 (to kalon) や友 (philoï) といった価値の存在を要請している。あるいは「変節 (metabolai)」ないし「裏切り行為 (prodosia)」は、どんな場合にも排除されるべき悪徳として、そういう意味での普遍的な悪として語られているふしもある。「我々の行動の妥当性 (hos de eikota) については、次の点を考えていただきたい。即ち、ラケダイモン人たちの国制 (politeia he Lakedaimonion) がもっとも勝れたものであるように思われる。ラケダイモンにおいては、監督官 (エフォロイ) のうちの誰か一人が多数派に (tois pleiosi) 従わず、政権 (ten archen) に異を唱え、もって現行の政策に反対するならば、監督官 (エフォロイ) はもとよりのこと、ポリスの自余のすべての構成員は彼に最大の罪状 (tes megistes timorias) を認めるものと諸君は考えないだろうか。もし諸君に思慮があるなら、この男テラメネスを生かしておかず、諸君みずからを生かしておくだろう。な

ぜなら、この男の命が救われたなら、諸君とは反対の意見を抱いている連中の多くをのさばらせることになろう (mega phronein poiese) が、彼が殺されるなら、ポリスの内外を問わずすべての人の野望 (tas elpidas) を断ち切ることになるからである⁽³⁷⁾。」

以上のクリティアスによるテラメネス弾劾演説から、彼がスパルタの国制を最善として認識していたこと、そして、そのために敗戦の混乱と危機の時代に乗じて強引に寡頭政権を樹立しようとしたこと、そのためには民主政に加担する勢力を排除せねばならなかったこと、等々が窺えるのである。

4 テラメネスの弁明

以上の弾劾を承けてテラメネスの弁明が始まる。まずアルギヌーサイ事件に関連して自己の正当性を訴えた。そのうえでクリティアスという人間の来歴に狙いを定めて、クリティアス自身におけるある種の変節ないし不整合を指摘する。相手を告発するのに変節に訴える手法は変わらない。「もっとも (アルギヌーサイ事件の裁判のことで) クリティアスが思い違いをしたとしても私は驚かない。なぜなら、その裁判が行なわれたとき、彼はたまたまアテナイを不在にしておき、プロメテウスと共にテッサリアに民主政 (demokratia) を樹立しようと、支配者たちに立ち向かうべく (epi tous despotas) 農奴たち (penestas) を武装させていたからである。この男が当地 (テッサリア) で起こしたことは、ここアテナイでは一切あってはなるまい⁽³⁸⁾。」目下は三十人寡頭政の首魁クリティアスにしても、かつて外国ポリスでのこととはいえ民主政の闘士であったというのである。この主張の検証可能性は歴史家の職分に落ちる。それにしても寡頭政権を担いスパルタの国制が理想であると言って憚らないクリティアスにとって、こうした来歴の暴露は手痛い打撃だったはずである。

「私はこの男クリティアスとは同じ意見なのである。即ち、もし誰かが、諸君の支配を阻止しようと諸君に陰謀を企てている連中に力を貸すようなことがあれば、その人間こそ最大の罰 (tes megistes timorias) を受けることが正義に適う (dikaion einai) ののである、と。しかし、そういうことをしているのがいったい誰であるかは、我々の一人一人がこれまでにしてきたこと (ta pepragmena) と同時に現にしていること (ha nyn prattei) とを諸君がよく考えてみるならば、いちばんよく判断できる (kallista krinein) であろう⁽³⁹⁾。」過去と現在の整合性が人を信頼するための根拠だというのである⁽⁴⁰⁾。この点は、先にクリティアスによって指摘された「変節 (metabolai)」や「裏切り行為 (prodosia)」が政治的信条の似如何を問わず排除されるべき悪徳として語られたこと、また、「名誉 (to kalon)」や「友 (philoï)」が普遍的な価値であると示唆されたことと、ほぼ同工異曲であると解されよう。

「ところで、諸君が評議員職 (bouleia) に就き、官職が与えられ (archas apodeichthenai)、所謂職業的告訴人を告訴するまでは、我々はみな同じ意見を抱いていた。しかし、これら三十人が貴族たち (kalous te k'agathous) をも逮捕に乗り出してからは、私はこれら三十人とは反対の見解をとり始めたのである⁽⁴¹⁾。」テラメネスの認識では、寡頭政権が貴族層を支持基盤としていたにもかかわらず、必ずしも首尾一貫して政策が貴族層の利害に合致してはいなかったことになる。政権は内部に意見の対立を抱えていたことが分かる。「というのも、すでに私は気づいていたのだが、名実ともに有能な人物であるサラミスのレオンが何一つ不正も働いていな

いのに殺害されるにおよんで、彼のような立場にある人は恐怖に陥ったであろうし、恐怖を抱きつつも現下の国家体制 (teide tei politeiai) に反旗を翻すだろうということである。また、これもまた私の気づいていたことだが、ニキアスの息子ニケラトスが逮捕されるにおよんで——かつて息子も父親も民主政に加担するようなこと (demotikon) を何ひとつしていないのに——、彼のような人は我々三十人に敵意をもつだろうということである⁽⁴²⁾。」こうした発言から、政治的中立を保った人間の評価を巡って政権内部に不統一があったことが知られる一方、テラメネスもまた貴族派対民主派という二分法を前提にしている事実が確認できるのである。

「さらにアンティフォンが我々の手にかかって殺害された。この男は戦争の折に二艘の高性能の三段櫓船を提供したのだ。これではポリスに好意を寄せる (現政権を認める) 人々でさえ (hoi prothymoi tei polei) みな我々に疑念を抱くだろうと悟ったのである。私はまた、三十人が各々一人の在留外人 (ton metoikon hena) を逮捕するべしという提案があった際にも反対意見を述べた。なぜなら、在留外人を殺害すれば、彼らがこぞって我々の現体制に敵対することになる (polemioi esointo) は全く明らかだったからである⁽⁴³⁾。」この推察から、在留外人は先の二分法的枠組みのなかで民主派に分類されたことが分かるが、一方で、在留外人、奴隷および極貧層を市民に加えるか否かが民主政そのものの形態を巡る論争の一部であったことについては、後に話題となるであろう。

「(スパルタの) 守備隊を備うことにも私は賛成ではなかった。なぜなら、我々支配する側が支配される側を容易に掌握できるように、まさに (守備隊と) 同数の市民を味方しておくことも可能だったからである。ポリス内の多数が現政権に (tei atchei teide) 敵意をもつようになり、多数の者が亡命者 (phygades) となるのを見るにつけ、トラシュブーロスであれアニュトスであれアルキビアデスであれ、彼らを国外追放する (phygadeuein) のは好ましくないと思った訳である。というのも、有力な指導者 (hegemones hikanoi) が大衆 (toi plethei) に味方していることや、指導者たらしめている人に (tois d' hegeisthai boulomenois) 多数の味方が存在することが明らかになって、反対勢力 (to antipalon) が強大になっていることを私は知っていたからである⁽⁴⁴⁾。」テラメネスのこの懸念は結果的に正当なものではあった。トラシュブーロスは亡命先から帰国するや民主派の首領としてペイライエウス軍を組織することになるからである。

「このような忠告を公然とする人間はポリスに好意的な者と看做されるべきか、それとも裏切る者と看做されるべきか、どちらが正しいのであろうか。クリティアス、敵を強力にさせているのは、敵意を抱く者たちの増加を食い止めている人間ではないし、味方の数を最大限に保つよう献策している人間でもない。むしろ、不正に財産を没収し、なんの不正も働いていない者たちを殺害している連中こそが反対勢力を増強させているのであり、彼らはまた醜い利得によって (di' aischrokerdeian) 友人ばかりか自らをも裏切っているのだ⁽⁴⁵⁾。」クリティアスの方こそ現政権の足下を掘り崩しているのだという訳である。一読して分かるとおり、テラメネスの弁明は逐一クリティアスが彼に加えた罪状をクリティアス本人に投げ返す戦法である。裏から言えば、同じ罪状のやりとりは両者に共通する道徳意識、共通する精神価値を示唆するものであろう。

「私が真実を語っていることが理解できないなら、次の点を考えていただきたい。トラシュブーロス、アニュトス、その他の亡命者たちがここわがポリスで行なわれて欲しいと願っていることは、私が主張していることなのか、それとも、クリティアス一派が現に行なっているこ

となのだろうか。思うに、もはやいたるところ味方でいっばいだ (symmachon panta mesta) と亡命者たちは考えている。もしポリスの最強部分 (to kratiston tes poleos) が我々に味方していたならば、一步なりとも国土に足を踏み入れ難いと彼らは考えたことであろう⁽⁴⁶⁾とテラメネスは主張する。ここで最強部分という概念構成が特に注目される。先程の「有力な指導者 (hegemones hikanoi)」という概念が「大衆 (to plethos)」を味方につける能力として構成されていたように、彼の発想においては、結局は多数 (demos, pleistoi, plethos, polloi) を掌握した勢力が「ポリスの最強部分 (to kratiston tes poleos)」として構成される。これは民主政 (demokratia) を支持する論理ではなかろうか。この点はアリストテレスの報告が正鵠を射ている印象を与える。しかし、占領下でリュサンドロスが寡頭派に加担した混迷の時代であった——その意味ではまさに危機の時代でもあった——とはいえ、三十人の一人として寡頭政権に参画したテラメネスの行動軌跡から言えば、この理論構成は何程かの不透明さを我々に印象づけるのではなかろうか。

「さらに、彼が私のことを絶えず変節して止まない (aei pote metaballesthai) ような人間だと言ったことについては、また次の点を諸君には考慮して欲しいのだ。そもそも四百人の国制 (epi ton tetrakosion politeia) に賛成したのは他ならぬ民衆自身 (autos ho demos) だったのだ。ラケガイモン人たちは民主政以外のどの国制にも信をおくものと民衆は教えられている (didaskomenos) からである⁽⁴⁷⁾。」ここでテラメネスは四百人の寡頭政が民衆の選択に拠ったものだとは弁明しているが、アリストテレスは「この事件の首謀者 (aition malista) はペイサンドロスとアンティポンとテラメネスとであった⁽⁴⁸⁾」と総括している事情を勘案すると、評議員の面々がこの説明に納得したかどうかは疑わしい。ただし、民衆 (ho demos) というものは必ずしも定見をもたず、民衆指導者 (demagogos) の扇動ないし教唆によって容易に揺れ動くものだというテラメネスの嘆きが行間から滲み出ているように思われる。

そこでテラメネスは、これまでの弁明が彼の政治的信条をやや曖昧にしかねない憾みを一気に払拭しようとするかのように、彼にとって望ましい国制についてやや具体的に語る。「クリティアス、私は次のような人々とは常に戦うであろう。(1) 奴隷 (hoi douloi)、および、金詰まりでポリスを売り渡すような(極貧の)連中までもが民主政治に参加しないかぎり、立派な民主政 (kale demokratian) とは看做さないような人々。さらに、(2) ポリスにおいて少数者による (hyp' oligon) 専制的支配 (tyranneisthai) (僭主制的な寡頭政治) が確立されないかぎり、立派な寡頭政 (kale oligarchian) は成立しないと考えるような人々。馬ないし丸盾などを自弁したうえで(騎兵あるいはホプリテースとして)ポリスのお役にたてるだけの能力のある人々 (tois dynamenois ophelein) と共に国制を整える (diatatten ten politeian) のが最善だと以前に考えていたし、現在もなお私はその見解を変えてはいない⁽⁴⁹⁾。」テラメネスの政治的信条は穏健民主政にあったとはしばしば推測されているところだが、恐らく妥当な結論であろう。武具を自弁しうる市民戦士を中核とするポリスは、クレイステネスやソロン型の父祖の国制 (patria politeia) のことに他ならないからである。奴隷や貧民層をも加えた民主政を「立派な民主政治 (kale demokratia)」と看做す思潮をいま仮に「ウルトラ・ラディカル・デモクラシー」と呼んでおけば、テラメネスはそれには与しない一方、僭主政治にかぎりなく近い専制的な寡頭政治を「立派な寡頭政治 (kale oligarchia)」と看做す思潮をいま仮に「デスパティック・オリガーキー」と呼んでおけば、彼はこれにも与しない。恐らく別室に控えていた三十人——クリティアスとテラメネスは除いて——は、まさにこの瞬間、寡頭政権を担った同志の口からあ

からさまに民主政を擁護する言葉を聴いたことになる。

「クリティアス、いったい私がどこで（過激な）民主派の連中と手を組んで、あるいは、専制的な（寡頭派の）連中と手を組んで貴族層の人々（*tous kalous te k'agathous*）から市民権を奪おうと（*aposterein politeias*）したのか、ここであなたが提案できる（*eipon*）なら言って欲しい。なぜなら、そういうことを私が現にしているとか、あるいは以前にしたことがあるということが証明されるならば、私は極刑（*ta panton eschatotata*）に甘んじ死を受け入れる用意があるからである⁽⁵⁰⁾。」以上がテラメネスの弁明であった。

5 テラメネス処刑前後

テラメネスの弁明に評議会は大声をあげて「明らかに好意的に（*eumenos*）反応した⁽⁵¹⁾」とクセノフォンは伝えている。このまま評決に出ればテラメネスの勝利は動かず自分の立場は危険なものになると判断したクリティアスは、短剣（*ta egcheiridia*）を忍ばせた者たちを聴衆と被告テラメネスの間の仕切り板のところに並ばせて評議会を威圧、そのうえで言った。「評議員の諸君、これが指導者としての私に求められる義務だと思う。即ち、友人たちがいまや騙されようとしている、これを見逃しておく訳にはいくまい。それにまた、ここでこうして（短剣をもって）陣取っている連中も、もし我々があからさまに寡頭政を侮辱している男を放免するなら、我々を許さないとやっている。新しい法律はこうである。三千人の登録名簿に記載されている者は、諸君の投票なしに処刑になることはない、と。名簿（*katalogos*）に記載されていない者の生殺の権利は三十人（*triakonta*）にある、と。そこで私は、諸君全員の同意を得たうえで、このテラメネスを名簿から削除する（*exaleipho ek tou katalogou*）。（名簿から削除されたのだから）我々はこの男を処刑にするものである⁽⁵²⁾。」かくしてクリティアスは事実上評議会を圧殺した。クセノフォンに従うかぎり、議場にさしたる混乱もなかった。

以上のクリティアスによるテラメネス弾劾に対する抗弁はなきに等しい。「諸君、なによりも適法な処置（*ta panton ennomotata*）を嘆願する。私なり諸君の誰かなりを思い通りに名簿から削除する権利はクリティアスにはないはずだ。私の場合であれ諸君の場合であれ、最終判決（*krisis*）はまさに三十人が起草した法律に従うべきなのである⁽⁵³⁾。」テラメネスは続ける。「神かけて、この（演説用の）祭壇がなんの償いにもならないことを私は百も承知している。しかし、これだけは指摘しておきたい。この三十人は人間に対してこのうえもなく不正である（*peri anthropous adikotatoi*）だけでなく、瀆神のきわみにある（*peri theous asebestatoi*）ということだ。貴族の諸君（*kaloi k'agathoi*）、諸君のどの名前と較べても私の名前を名簿から削除することが特段に容易である訳でもないのに、諸君が諸君の正義を護ろうとしないのには私は驚愕させられるのである⁽⁵⁴⁾。」

テラメネスの弁明もここで尽きた。三十人のメッセンジャー（*keryx*）がヘンデカ（刑務委員）にテラメネス逮捕を命令。この後、三十人が議場に入るのを見届けてクリティアスは次のように言った。「私は法によって裁かれた（*katakekrimenon kata ton nomon*）このテラメネスを諸君に引き渡す。ヘンデカの諸君、彼を逮捕のうえしかるべき場所に連行したうえで、その後の処置をして欲しい⁽⁵⁵⁾。」テラメネスは大声を張り上げて防戦したが、仕切り板のところには短剣を隠し持った青年たちが控え、議場の前は守備兵で固められている状況では、「評議会が沈黙

していた (he de boule hesycian eichen) ⁽⁵⁶⁾」のも余儀ない結末だったろうか。ヘンデカがテラメネスを連行、アゴラにさしかかったとき、テラメネスは大声をあげて違法な仕打ちを市民に訴えた。「静かにしないと目にあうぞ！」とおどされて、「もし黙れば目にあわないか？」とテラメネス⁽⁵⁷⁾。ドクニンジン (to koneion) を飲み干しまさに死にゆく間際、テラメネスは言った。「愛するクリティアスの健康に乾杯！⁽⁵⁸⁾。」クセノフォンもまた蛇足を加えて曰く。「この男や嘉し。死を前にして思慮 (to phronimon) も諧謔 (to paigniodes) も彼の魂を離れなかったとは⁽⁵⁹⁾。」かくしてテラメネスは処刑された (前404年) ⁽⁶⁰⁾。

6 まとめと考察

以上、三十人寡頭政の成立からテラメネスの処刑までの概略をたどり、主としてクリティアスによるテラメネス弾劾と、それに対するテラメネスの抗弁・弁明を読解してきた。ここではさらに一步進めて、それらがいかなる問題を孕んでいるのかを考察したい。

先ず我々が強く印象づけられたのは、クリティアスにしろテラメネスにしろ、彼ら政治家が大衆ないし民衆 (demos, polloi, pleistoi, plethos) に対して貴族層 (kaloi k'agathoi) を対立させる二分法を前提にして権力獲得 (pleonektein) を論じるという基本的な事実である。この二分法のイデオロギーは、前411年の寡頭政樹立、すぐにこの政権は転覆して全市民が告訴権を獲得するというかたちで民主政の拡大がみられたのも束の間、スパルタ主導でまた三十人寡頭政権が樹立されるという民主派と寡頭派の激烈なせめぎあいという史実からも検証されるところであろう。この時代の政治家は権力獲得を発想する場合にはこの二つの国制 (politeia) の間で選択の是非を自問したのであろう。いかなる国制 (politeia) が最善か——やがて、プラトンの主要な関心事となり、その伝統を承けてアリストテレスは倫理学を政治学の一部に回収してしまう——と問題を立てれば、国制選択という問題はそれ自体が倫理学の、ひいては政治学の問題圏域にあることになる。

しかし、いまかりに穏健民主政を奉じるテラメネスと寡頭政を奉じるクリティアスの間の自己正当化という問題に焦点を当てると、事態はどういう相貌を帯びるであろうか。両者ともに少なくとも理論としては国制の価値序列というアプリオリを用意してはいない。彼らによるそうした著作は残されていない。国制選択というコミットメントは彼らの信念の吐露に他ならなかったであろう。逆に言えば、国制選択にコミットするという権力獲得活動 (pleonektein) そのものが正義ないし不正義の実現に重なるとするような全体主義——政治の全般に道徳を介在させる道徳一元論——はまだ存在していないということである。政治的信念の妥当性は権力闘争という現実の勝敗のなかで審判されているにすぎない。

先のクリティアスの主張を想起して頂きたい。「誰であれ権力の獲得 (pleonektein) だけに心を配り、なんら名誉 (tou kalou) や友 (ton philon) のことを顧みない人間であると判明すれば、こういう男を見逃さねばならない理由があろうか。この男の変節 (autou tas metabolas) を承知しているから、同じことを我々にしないか我々は注意する必要がある。よって我々はこの男を我々と諸君に陰謀を企てる者としておよび裏切る者として (hos prodidonta) 告発するものである (hypagomen) ⁽⁶¹⁾。」権力の獲得 (pleonektein) は現実の闘争過程であり、それはそれ自体において道徳的な善悪を直接言挙げできるような場面ではあるまい。むしろ、民主派

に加担しようが寡頭派に加担しようが、名誉や友を顧みず、変節をかさねて仲間を裏切る行為が非難されている。そういう行為は「陰謀を企てる (epibouleuein)」行為だと言われている。しかも、こうした見方はテラメネスにも共通で、このような意味での道徳的善悪は、行為主体に関して「これまでしてきたこと (ta pepragmena) と同時に現にしていること (ha nyn prattein) とを諸君がよく考えてみるならば、いちばんよく判断できる (kallista krinein) ⁽⁶²⁾」と言われていた。我々は、この論点を行為の整合性 (首尾一貫性) の要求として押さえておきたい。道徳的な責任は行為ないし行動の「整合性」によって問われている。その意味ではテラメネスもまた、ウルトラ・ラディカル・デモクラシーを奉じる人々、デスパティック・オリガーキーを奉じる人々とも「戦うであろう (polemo) ⁽⁶³⁾」と言ったのであって、彼らの「道徳的な責任」を問題にしようと言っているのではない。ウルトラ・ラディカル・デモクラシーを奉じること一般を道徳的次元の問題に還元するような思考様式は見受けられない。

さらにもう一つの問題を指摘しておきたい。これはテラメネスによって提出されたものである。政治的中立の問題である。「いやしくも民衆 (demos) に尊敬されている人間であって、かつまた、貴族層 (tous de kalous k'agathous) に対してなんらの危害も加えていない人間が殺されるのはよろしくない (ouk eikos) ⁽⁶⁴⁾。」いわば、権力獲得という戦争状態にあって、両方の当事者に対して中立を保っている非戦闘員 (innocent) を殺害することは道徳的に許されないという主張である。権力の獲得過程 (pleonektein) が中立的な非戦闘員の殺害を必然含意すると結論する論拠もないが、「政治上の諸問題 (ta politica pragmata) に手をそめようと企てたなら身を亡ぼしていた (apolole) ⁽⁶⁵⁾」と語ったソクラテスの悲観主義も、万人が守るべき行動規範、万人にアブリオリに妥当する生活規範について述べたものではなかったであろう。以上、小論は次の諸点を指摘することができる。政治の前線で活躍した指導者たちには主義主張と行動の首尾一貫性ないし整合性が求められたこと。名誉 (to kalon) や友 (philon) といったいわば普遍的な価値が認められたこと。権力獲得という戦闘過程においても中立的な非戦闘員 (innocent) の殺傷は少なくとも道義的責任が追及されえたこと。以上の論点を確認することをもって小論の結びとしておきたい。(1993.10.12)

注

- (1) Xenophon, *Hellenica (Historia Graeca)*, II, ii, 15.
- (2) *Ibid.*, II, ii, 20.
- (3) *Ibid.*, II, ii, 23.
- (4) *Ibid.*, loc. cit.
- (5) Xenophon, *op. cit.*, II, iii, 1. 寡頭政を嫌悪したアテナイ人はこの政権下で選出されたアルコン・エポニュモス、ピュトドーロスの名前の使用を忌避したからだとクセノフォンは伝える (*ibid.*).
- (6) *Ibid.*, II, iii, 2.
- (7) *Ibid.*, II, iii, 2. 今次の根本民主政 (radical democracy) ではなくて、クレイステネス・ソロン型の民主政治が志向された。cf. Aristoteles, *Atheniensium Respublica*, XXIX.
- (8) *Ibid.*, II, iii, 11.

- (9) *Ibid.*, II, iii, 12.
- (10) 以下、繰り返されるとおり、kaloi k'agathoi は demos (plethos, polloi, pleistoi) に対置されてのみ使用されているのであって、民衆と貴族の二分法が前提されていることには疑問の余地がない。
- (11) Xenophon, *op. cit.*, II, iii, 13.
- (12) *Ibid.*, II, iii, 14.
- (13) *Ibid.*, *loc. cit.*
- (14) *Ibid.*, II, iii, 15.
- (15) *Ibid.*, *loc. cit.*
- (16) *Ibid.*
- (17) *Ibid.*, II, iii, 30. なお、kothornos を「日和見主義者」と訳す根拠については本文で触れる。
- (18) *Ibid.*, II, iii, 16.
- (19) *Ibid.*, *loc. cit.*
- (20) *Ibid.*, II, iii, 17.
- (21) *Ibid.*, II, iii, 18.
- (22) *Ibid.*, *loc. cit.*
- (23) *Ibid.*, II, iii, 23.
- (24) *Ibid.*, *loc. cit.*
- (25) Xenophon, *Hellenica*, II, iii, 24.
- (26) *Ibid.*, *loc. cit.*
- (27) *Ibid.*, II, iii, 25.
- (28) *Ibid.*, *loc. cit.*
- (29) *Ibid.*
- (30) Xenophon, *Hellenica*, II, iii, 27.
- (31) *Ibid.*, *loc. cit.*, 'he demou katalysis'における demos は国制 (politeia) としての民主政治 (demokratia) と解すべき好例である。
- (32) *Ibid.*, II, iii, 29.
- (33) *Ibid.*, II, iii, 30.
- (34) *Ibid.*, II, iii, 31.
- (35) *Ibid.*, II, iii, 32.
- (36) *Ibid.*, II, iii, 33.
- (37) *Ibid.*, II, iii, 34.
- (38) *Ibid.*, II, iii, 36-37.
- (39) *Ibid.*, II, iii, 37.
- (40) 行為の首尾一貫性ないし整合性は、その行為主体の「どのような人か」を決定する本質的な徴標であるという意味で、特に注目される論点であるように思われる。この論点はその人の「何であったかというそのこと (ト・ティ・エーン・エイナイ)」として折出されることになる。
- (41) Xenophon, *Hellenica*, II, iii, 38.
- (42) *Ibid.*, II, iii, 39.
- (43) *Ibid.*, II, iii, 40. なお、メトイコイの概念規定については以下を参照。P. Gauthier, *Symbola*,

Les étrangers et la justice dans les cités grecques, Nancy 1972, pp. 107-156, D. Whitehead, *The Ideology of the Athenian Metic*, Cambridge, 1977, pp.6-26.

- (44) *Ibid.*, II, iii, 42. なお、ここに見えるアニュトスはやがてソクラテス告発に乗り出し、彼を瀆神罪によって死刑に追い込む人物である。かれが国外追放になった背景には、少なくとも寡頭政権下で民主派に加担していた事実があったからであろう。
- (45) *Ibid.*, II, iii, 43.
- (46) *Ibid.*, II, iii, 44. もともとテラメネスが父祖の穏健民主政を志向していたことについては以下を参照。Aristoteles, *Atheniensium Respublica*, XXXIV, 3. なお、注(7)も参照。
- (47) Xenophon, *Hellenica*, II, iii, 45. cf. Aristoteles, *op. cit.*, XXXI, XXXII, XXXIII.
- (48) Aristoteles, *op. cit.*, XXXII, 2.
- (49) Xenophon, *Hellenica*, II, iii, 48.
- (50) *Ibid.*, II, iii, 49. なお、'eipon'が議会において「提案をする」という専門用語であったことについては以下参照。Liddel & Scott, *Greek-English Lexicon*, s. v. IV.
- (51) *Ibid.*, II, iii, 50.
- (52) *Ibid.*, II, iii, 51.
- (53) *Ibid.*, II, iii, 52.
- (54) *Ibid.*, II, iii, 53.
- (55) *Ibid.*, II, iii, 54.
- (56) *Ibid.*, II, iii, 55.
- (57) *Ibid.*, II, iii, 56.
- (58) *Ibid.*, loc. cit.
- (59) *Ibid.*
- (60) Xenophon, *Hellenica*, II, iv, 1.
- (61) 注(36)を参照。
- (62) 注(39)を参照。
- (63) Xenophon, *Hellenica*, II, iii, 48.
- (64) 注(16)を参照。なお、ここでの eikos は倫理的な意味をもっていると思われる。
- (65) Plato, *Apologia Socratis*, 31d7-8.

Une Note sur le Portrait des Hommes
Dans une Situation Critique
— Xenophontis, *Historia Graeca*, II, ii, iii, iv —

Ikuo FUJISAWA*

RÉSUMÉ

Mon petit essai est une tentative qui vise à tracer les grandes lignes de l'image des hommes dans une situation critique. Il a apparu une pareille situation avec l'apparition des Trente, *c. à d.* à Athènes les trente tyrants (hoi triakonta) à la fin du V^e siècle avant Jésus-Christ, dans laquelle Kritias aussi bien que Thérarmène jouèrent un rôle important.

Mon petit essai veut en extraire et traiter les éléments fondamentaux de la condition humaine, qui ont quelque rapport avec la morale au sens large du terme, par l'intermédiaire de la polémique faite entre Kritias et Thérarmène.

* Division of Social Studies